

今回、福島へボランティアに行くことになった時に「（西日本豪雨に見舞われた）岡山とか広島じゃなくて？ 今更福島に行ってることあるの？」と言われました。おそらく一部の方にはボランティア活動と言うと“瓦礫の片付け”などのイメージが強いのでしょうか。じゃあ、瓦礫が片付いたらもうボランティアは必要ないのでしょうか？

まだ震災から間もない頃、子供たちを連れて東北へボランティアに行かれた方のお話をします。途中でラーメン屋で食事をとることになったそうです。ところが店に入ってみると店主の機嫌が悪い。押し寄せるボランティアに態度の悪い輩がいたのか？ ボランティアだとわかる団体に嫌気がさしているようです。居心地の悪さを感じながらもラーメンを注文、食べ始めてから子供の一人がつい自然に「美味しい！」って笑顔を見せたとき、初めて店主の顔にも笑顔が戻ったそうです。この「美味しい！」の尊さを忘れちゃいけないと思うんです。

「福島は天災ではなく人災だ」という言葉があります。みんなふるさとからバラバラに散らばっただけでなく、残った人たちの気持ちもバラバラにされました。一本の道を隔てたご近所さんが帰還困難区域で国や東電からの賠償金が得られる。でも道の反対側は、安全とは思えないのに自主避難扱いになり賠償金はゼロ。問題は他にもあります。同じ仮設住宅に住んでいながら昔住んでいた場所はあかせない（賠償の有無がわかってしまうから）、家族全員が生き残ったことに引け目を感じる（周囲の方が家族を失っていてその悲しみがわからない）、地元の人同志では放射線量の話はできない（放射能に関して見解が違うので話す人間関係の溝になる）、自分の辛い気持ちを地元の人に話せない（もっと辛い思いをしている方がいるので話すのがはばかれる）……。遠くからきた私たちの前でなら流せる涙がありました。

今回の滞在中もこんなことがありました。朝早くに道の駅に桃を買いに行ったら、県外から沢山の客が行列をなしていたそうです。私なら、「うちら地元の人の方がなくなるやん！」と思うかもしれない。でも「風評被害もなんのその！ 県外から沢山買いに来てくれた！」ってみんなで喜び合っていました。ある町では「7年目にして歯科医院がオープンした」とニュースで取り上げられたそうです。立派な学校を建てて、帰ってくるあてのない子供たちを待っている。でも肝心の教師が足りない。こう書くと「福島めっちゃ暗いやん！」となりますが……。皆さんホントに明るく健気に生きておられる。

だから「福島に行ったら何ができるか？」とか考えるより、みなさん喜んで福島への旅を楽しみましょうよ。もちろんいろいろ勉強になりますし、肉体労働を体験すれば、もれなく爽やかな達成感も感じるすることができます。でも、それより純粋に明るい笑顔を届けることこそがもっと大切なんじゃないでしょうか？ 喜んで欲しい人がいるなら「自分がその人のお陰で嬉しい！ 幸せだ！」と笑顔で表すことが一番です。

福島にはたくさん美味しい食べ物があります。幸田司教様がいろいろ教えてくださいましたが、“イカ人参”と“川俣にがりとうふ”と“天のつぶの生酒”が特に絶品でした。そういうものを買って食べたり飲んだりするのも立派な復興支援です！（笑）福島の皆さんが待っています。どうぞみなさんも福島へ楽しい旅を！！

今年の日本の夏は猛暑の連続で今までにない異常な夏でした。毎年、夏のボランティアは岩手県の大槌町へ行っていましたが、今年春にカリタス大槌ベースが閉鎖となり夏のボランティアも福島・南相馬にシフトされました。自分自身は6度目の福島になります。今回の主な目的は、浪江町での竹林伐採と枝打ち、ベース内での”真ごころサロン“の小物づくりのお手伝い、松木町教会の夏祭りお手伝い、“ふっこうのかけ橋”(2013年～2015年に福島から山口に保養にお招きしたプログラム)の参加者・家族との再会・交流した。

昨年末以来、8か月ぶりに南相馬を訪れて感じた事は、町に少しずつではあるものの、活気が出てきたかなということでした。福島駅から南相馬に移動するバスからの景色も、初めて訪れた4年前、驚いて見た黒いフレコンバッグ(汚染土などが詰められています)の山、それを隠すために山肌に塀を作り置いてあったものが、年が経つにつれ公然と道路前に積まれる様になり、それが今年はこれまで置いてあった場所は更地になり(以前は田畑だったのでしょうか?)、大規模な数か所に集積され大きなシートをかけられ保管されるように変化していました。ひいき目に考えれば少しずつでも処理されているのかなと思う。二日目の視察で見た市町村単位で作られた、除染で集められた草木等を焼却する施設が稼働し始めていることも前進の証である。こうやって少しずつでも実行され、目の前の心配の種が解消されることが、被災地の方にとっては大切だと思う。原発周辺の町も避難解除された所とそうでない所の扱いの差が極端であることは、前回の感想でも書いたが、たった4メートル幅1本の道を境に、帰宅の可否・賠償金の違いが生じていることが、未だに理解しきれない。何を基準・根拠にしているのでしょうか?

視察の際、新しい店舗、工場そして建て替えた一般住宅と街中の様子も変わりつつあることが実感できました。周辺の放射線量も当初に比べれば相当下がっているのも事実。ただ福島第1原発付近を走る国道6号線は窓を開けての走行は未だに“NO”。歩行はおろか、自転車走行もダメ、長時間身体を空気にさらすこと自体が危険なことなのです。国道6号線の道路沿いの各家の前に建てられている侵入禁止の非情なゲートが、開放される日が来るのかどうか・・・

3日目は浪江町での竹林伐採を手伝いました。昨年春には、小高地区で伐採作業をしましたが、今回は「汗が滴り落ちるとはこの時のことをいうくらい」の大汗での作業でした。暑さの中、それぞれのタレントに応じて、チェーンソーで竹を根元から切る人、枝を掃う人、また1本の竹を1メートルずつ位に小分けにカットする人等、10数人で朝9時ごろから3時頃まで、20分作業10分休憩を繰り返しました。相当数の竹を退治し、久しぶりに「野外作業をヤッター!」の満足感と疲労感を味わいました。これらの作業で果たしてどの位、放射線量が落ちるのか本当のところを知りたいです。

放射能で汚染された物資にはこの先、大きな作業が控えています。今まで除染した汚染土など(放射性廃棄物)を貯蔵する中間貯蔵施設の建設です。何千万袋あるかわかりませんが、これだけの物を一体どこに貯蔵できるのか? 建設先は決まっていますが地主との交渉は難航し遅々として進みません。

福島市の松木町教会の夏まつりは例年、主に浪江町から避難されていた宮代仮設住宅で実施され

ていた様ですが、今年で仮設が閉鎖された為、その方たちを教会に招待して行われました。仙台から平賀司教様、南相馬ベースからも幸田司教様が来られました。南相馬ベースのスタッフの皆さんで金魚すくい（実際はスーパーボールをすくいます）を実施、小さいお子さんに好評でした。又、柴田神父扮する恐竜が突然現れ、会場にいた大人も子供もビックリ！中には泣き出す子も出て、会場を沸かせました。会場には、本場浪江のB級グランプリを取った浪江焼きそばのキッチンカーも来場、特別価格で販売されました。初めて食べましたが焼うどんにネギと紅ショウガ、ソースが独特でおいしかったです。今回、この会場で私にとって思いがけない出会いがありました。今から40数年前に私どもの結婚式を司式していただいたイバニエス神父様に再会することが出来ました。イバニエス神父様は、たまたまコングレガシオン・ド・ノートルダムの修道院で黙想指導に来られていて、これもたまたま修道院に届ける荷物があるとのことで柴田神父が行かれ、そこで何かの拍子に私の名前が出て、今、本人が松木教会にいますとなって、わざわざ来てくださいました。車から降りてこられたのを見て、本当になぜここに？この神父が？・・・ビックリでした。神様ありがとうございます。会場では“ふっこうのかけ橋”がご縁で知り合えた佐久間さん、安齋さん家族、そして久間木さんにも会うことが出来ました。子供さんたちの成長ぶりには目を見張ります。この度は会えない家族もありましたが、またの機会を楽しみにしています。夏祭りでは、そのお母さんたちのフラダンスがありました。真剣でかつ楽しそうでした。会場みんなで盆踊りもしました。松木町教会はこれからも、この様な夏のイベントを通して浪江の方々と繋がり続けるのでしょうか。我々も何とか小さなお手伝いを続けられたらなと思いました

最後に、今回はいつも一緒にいて下さるシスター熱海さんが術後の体調管理の為に、参加が叶いませんでした。それでも、福島到着時はわざわざ駅までお出迎え頂きました。暑い中本当に感謝です。そしてもう一方、氏家さんにも感謝・感謝です。いつも我々の宿泊の為に家じゅうを開放して下さいます。又、おいしい食事を提供頂き、本当にいくら感謝しても、しきれませんが、このお礼を福島の復興の為に注がせて頂きたいと思います。

この度のボランティアは、学生さんもクラブ活動とか学校行事とかのスケジュールが先行し、幼稚園の先生たちも研修会などと重なり、結果的に山口からの初参加の方は1名でした。でもボランティアは人数ではないと思います。たとえ1人でもその人がその地に行って何かの役に立ちたいという強い意思があればそれは大きな成果です。現場を見て、肌で感じ、その地で汗し、それをもって帰り、色んな人に伝え聞かせれば、そこからまた新たな芽が生まれて来ると思います

こんな意思をお持ちの方が続く限り、何としても東北ボランティアを継続していきたいと思います。

南相馬ボランティア 徳山教会 柴田 潔 神父

南相馬ボランティアに行く前に、西日本豪雨のボランティアを何度かして参加しました。水害のボランティアは暑い中での泥出しや家具の搬出など・・・きついけれども片付いていく充実感もありました。現状は厳しいですが、何年後かには落ち着いてくることが想像できました。しかし、福島は原発事故の影響で7年以上経っていても、先行きが見えない感じを受けました。

今回は、初日は視察、2日目はベースでの真こころサロン、3日目は浪江町での竹林伐採のボランティアでした。視察では、初めて訪れた2012年の夏に比べて、人が入れる地域も増えたし、ボラ

ンティア以外の人の姿もあり、だんだんと生活感が戻っている印象を受けました。しかし、竹の伐採の作業をしている間に車も人も通りませんでした。7年5ヶ月経って人が戻れてない・・・この現実、現地に行ってみないとなかなかわからないと思いました。メディアでは、帰還できるようになったと報道されていますが、「戻れてない」「戻れてない」・・・この心の重さは豪雨の被災地とは全然違うものを感じました。

原発事故が起きて、着の身着のまま避難させられ7年以上も経過しました。はっきりした科学的な根拠もないのに「もう戻れる」と言われてしまいます。このような理不尽さを福島の方だけが被っています。日本中の方が、そのことに関心を持つべきだと感じました。もし、東京で同じことが起きたら、このような状況を甘受できるでしょうか？ そうではないでしょう。福島の方の人権は軽く見られてないか？ 気掛かりです。福島に行ったらこの異常な状況を思い出せます。しかし、ずっと来なかったら意識から遠くなっていくでしょう。だんだんと“なかったこと”にされてしまいます。今でも、NHKの夜7時のニュースの前には、天気予報に続いて、今日の放射線量、海に放出されている放射線量が報道されています。原発事故から7年5ヶ月経っても福島の方にとって、放射能は重大な関心事であり続けています。

カリタス南相馬ベースの良さは、食事などのもてなしに加え、祈りの雰囲気があることです。朝の教会の祈り、ミサは平日にも関わらず主日と同じように大事にされています。夕方は、聖体礼拝をします。わたしは、日頃、幼稚園の仕事が忙しくてどうしても祈りが疎かになりがちです。こうして、南相馬ベースにくると、祈り、ミサ、祈る共同体の素晴らしさを再認識できます。ボランティアの後、ベースのスタッフのシスター早川さんの紹介で、名古屋の聖霊会の黙想会を受け持つことになりました。これも、2012年からベースに通ってきたことがご縁でいただいた奉仕でした。その黙想会では、自分なりに、わかりやすい内容にしようと準備しました。司祭としてのアイデンティティーを南相馬ベースは思い出させてくれました。

南相馬ベースは、祈りと奉仕の共同体です。地元の方からも「ここはよそとどこか違う雰囲気がある」と言われてると聞きました。確かにその通りです。今回もたくさんのをいただきました。

ボランティアの後、氏家さんのお宅にお世話になり、ふっこうの架け橋の家族と食事をして、桃狩りができました。桃狩りは初めての体験でした。周南に戻ってから、幼稚園の子どもたちにも紹介しました。また、桜の聖母の学童保育“星の子サークル”の児童に、恐竜の組み立てキットをお渡ししたら、出来上がった写真とお礼の手紙が届きました。今回は直接会えませんでした。このような楽しいやり取りができることも幸せです。これからも、福島の方とつながって、自分自身も成長していきたいです。

夏季 南相馬ボランティアに参加して 築地教会 竹内 克子

昨年春、福島ボランティアに東京から参加させていただきました。東日本大震災、原発事故から6年経ったとはいえ、初めて福島を訪れ視察した私には復興が程遠く感じました。ゴーストタウンの街の様子に、ただただ息がつまる思いでした。

東京から到着した翌日、今回も南相馬から浪江町、富岡町、双葉町と現地の状況を案内させていただきました。山積みされた黒いフレコンバッグが目立たないように塀で囲まれ、袋の劣化による詰め替え作業があちらこちらで行われていました。前回は、シーンとしていた街には車が行き交い、工事関係者の人も多く、そのための宿舎が多く建てられていました。活気付いていましたが、住んでいる方の気配はほとんどなく、素直には喜ばませんでした。まだそのまま残っている津波で破壊

された建物の内部を見るにつけ、胸が痛みました。浪江町の旧請戸小学校は、今は、周囲に囲いが張り巡らされ中には入れませんでした。新しく建てた慰霊碑がいくつかあり、魂の安息のためにお祈りさせていただきました。だんだんと、津波の跡が整理されていく現況に、何か怒りを伴う寂しさを覚えました。岩手県の大槌町の旧庁舎の取り壊しに際して町内の人は「壊すも涙、残すも涙」と複雑な心境を吐露されていました。福島でも、年毎にの変わりゆく様に戸惑うがあるのでしょうか。

3日目は、カリタス南相馬で終日毎日開かれる「真こころサロン」の手芸クラブのお手伝いでした。仮設住宅集会所の閉鎖後、カリタスベースが部屋を提供して、地域交流の場として続けられています。皆さん、喜んで活動されていました。昨年、私もいただいたかわいい草履のミニストラップをパーツごとに分かれて担当しました。サロンに来てくれる方々は、お元気そうに見え、被災された方々を応援し励ますつもりでしたが、逆に力を勇気をいただいていたのは私たちの方でした。

カリタス南相馬ベースでは、シスターやスタッフの方々が本当に気持ちよく迎えてくださいます。台所から小気味良い包丁の音が聞こえてくる雰囲気は、懐かしい家庭的な和みの場です。楽しい食事を毎日いただきました。

4日目は、竹の伐採のお手伝いを少しさせていただきました。高齢の私には、切り倒されて短くされた枝を集めるくらいのわずかな作業しかできませんが、原発事故で住めなくなって久しい被災された方の辛い思いを肌で感じることができました。この体験を、東京に戻って周りの人に伝えることで、福島の復興の後押しをしたいと思っています。神父様が説かれる「進んで行く気持ち」をこれからも持ち続け、また参加したいと思っています。今回も、ご一緒させていただきありがとうございました。素敵な出会いがたくさんあり、多くの喜びをいただき感謝しています。

南相馬カリタスベースボランティアに参加して 上総房子

ずっと願っていた南相馬ボランティア活動に初めて参加することができました。十分な活動ができるのか、若干の不安を抱えての参加でしたが、とにかく現地を訪れることが大切、というお話を聞いていたので、身の丈に合った働きができれば、との思いで決意しました。

カリタスベースに着いた初日、オリエンテーションと夕食時の、スタッフの方々とおいしいお心づくしのお食事を担当してくださるシスター方の暖かい雰囲気にながら心が和みました。

二日目、一日かけてスタッフの方が現地の実情をととても分かりやすく説明しながら現場を車で案内してくださいました。除染作業の現場、巨大な焼却炉などの除染施設、人気のない街並みを巡り、終わりのないとてつもない作業の現実を目の当たりにして、胸がふさがれる思いでした。通り一本隔てて、帰宅が困難な地域と可能な地域に分けられ、以前は近い共同体が分断されてしまったこと、片方には多大な補償金が支払われているのに、他方には、無償であったりすること、補償金による家族間のトラブルなど、年月とともに問題の質も変化してきているとの話を伺い、問題解決の糸口を見つけることの困難さを思ったことでした。

それでも、同慶寺をお訊ねして、ちょうど住職さんとお子さんがお寺の掃除をなさっていて、そのお姿に精いっぱい立ち上がり、困難に立ち向かおうとなさっている力強さと希望を感じました。同慶寺では、3月11日に、仏教、キリスト教の宗派を超えて、ともにご供養と鎮魂、そして復興を祈られたということをお伺い、心を打たれました。

日目は、地元の方々のためのサロン「真こころ」で、ご高齢のご婦人方とおしゃべりをしながら、ストラップ作りの作業のお手伝いをしました。大変でいらしたことは、想像に難くないはずなのに、被災時のご苦勞を控えめに、明るくお話しくださるご様子に強さと前向きさと本当の優しさを教え

られました。ただ、サロンの来られる方々はまだお元気で、外に出るエネルギーも持たず、閉ざされた中におられる方々のことを忘れてはならないと思いました。ストラップは、作る工程を知れば、実に細やかで丁寧さと簡単ではない技術を求められます。かわいい素朴なストラップは、家族、友人のお土産に大好評でした。

最終日、4日目は、午前中だけでしたが、竹やぶの伐採のお手伝いをしました。これは力と技術を要する作業で、あまりお役にたてたとは言えませんが、なかなかできなかった枝打ちが最後に成功した達成感は、得難い経験でした。酷暑の中、皆様と汗を流しながらの作業は爽快で経験できてとてもよかったです。

南相馬訪問で、数々の心に残る経験ができました。とりわけ心に残ることの一つは、カリタスベースで働いておられるスタッフ、シスター方、ボランティアのお仲間との出会いです。ベースで働くことになるまでの軌跡などを伺う機会にも恵まれ、それぞれの方々の人生の重みにも思いを馳せ、このベースは、様々な方々の糸で紡がれた絆なのだと思ったことでした。その方々の福島への熱く深い思いが私たち、県外にいる人との橋渡しとなっていることに感謝と敬意を抱きました。この機会を得て、福島は私にとってもとても近い存在になりました。決して忘れることなく、これからも心にしっかり刻み、そして私のまわりにも伝えていきたいと思います。

偶然にも幸田司教様ともお目にかかれ、ミサに与り、夜にはおいしいお酒とお心づくしのお料理をいただけたことも幸運なことでした。

このボランティアの機会を提供くださった柴田神父様、ずっとお世話くださった瀬川様に心から感謝申し上げます。

2018年夏季 南相馬ボランティアに参加して 高円寺教会 日出間 有子

私はこれまでに南相馬、大槌町の東日本大震災のボランティアに参加しました。今回が3回目になります。

初日は、昨年と同様、一日中、南相馬をはじめとする周辺の視察でした。原発事故による避難区域（帰還困難区域）、避難解除区域、津波の被害にあった区域です。昨年とほぼ同じ場所を見せていただきました。その中で、今回一番印象に残ったのは、道一本隔てて、片方は避難が解除され、もう片方は帰還困難区域になっている場所でした。同じ場所で、空気も一体のはずなのに、道を境に、人が住んでいい、住んではいけない、と分けられていることに何とも言えない違和感がありました。

また、昨年夏に行った大槌町に比べると、大槌は津波の被害が甚大でその悲惨さに圧倒されましたが、町全体が1つになって復興に向かっていると感じました。大槌町違いは、福島の復興は歩みが遅く、汚染土の入れ替え、除染などといったとてつもない作業が続いています。そのことに心が痛みます。

福島は人々が原発事故によって分断され、複雑な問題が生じていることを感じました。先ほどの地域のように、片方は賠償金がもらえていて、もう片方は打ち切られる。それによって、人の心も分断されている悲しい現実を知りました。

2日目は、今回初めての地元の方と1日おしゃべりしながら、手芸品を作りました。皆さんとても明るく会話も弾みました。でも、その中にも時折、悲しい話があり、家族が原発事故で分断され、お年寄り一人が南相馬に残り亡くなった話……。やはり、ここにも家族の分断による悲劇があちらこちらにあるのだと知りました。しかし、今回地元の方と1日触れ合うことで、私は救われた気がしました。悲しい現実の中でも、人と人が繋がりが、人の心を癒していくのかと。地元の方は、作業しながらのおしゃべり、辛い現実の中でも穏やかに明るい笑顔を見せてくださいました。そのことを思い出すと、今回もまた来られて本当に良かったと思いました。

3日目は、午前だけの活動でしたが、昨年につき、個人宅の竹林伐採でした。昨年同様、皆で体を動かし一緒に働くことで気持ちが楽になりました。

いつもこのような機会を作ってくださいる柴田神父様、そして山口から来られた皆さんのグループに温かく迎えてくださり感謝です。引き続き、皆さんと共に、福島のことを心に留め、応援していきたいと思います。